

令和 5 年 6 月 17 日現在

機関番号：23503

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2022

課題番号：16K04803

研究課題名（和文）障害のある子どものきょうだいと親がともに生きる支援プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a support program for parents for raising siblings of children with disabilities: Focus on family quality of life

研究代表者

阿部 美穂子（Abe, Mihoko）

山梨県立大学・看護学部・教授

研究者番号：70515907

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、障害児のきょうだい児育てに取り組む親の支援課題を家族QOLの視点から調査し、それに基づく親支援プログラムを開発し、実践により効果を検討した。北海道・北陸・関東・近畿・中国地域で行った「きょうだい児を育てる親へのアンケート」659の有効回答の88.5%の親がきょうだい児育てに悩んでおり、きょうだい児育てに悩む親が評価した家族QOLは、そうでない親より有意に低いことが示された。引き続き、月1回2時間、全6回からなる話し合い型のきょうだい児育て支援プログラムを開発し、参加を希望した母親16名に対し実施した結果、終了時点で「子育てがうまくいっている」評価が有意に高まったことが確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

障害児のきょうだいが抱える問題は、親の子育て上の課題でもあり、家族機能の問題と言える。しかし、これまで国内外で取り組まれてきたきょうだい支援において、親は理解啓発の対象ではあっても、直接の支援対象と見なされてこなかった。本研究の意義は、家族機能の中心的存在である親が直面するきょうだい児育ての課題を家族全体のQOLの視点から明らかにし、さらに、親自身をエンパワメントして、きょうだいの課題に取り組むことを可能とする支援プログラムを新たに開発したことにある。これにより、障害児者家族がはらむ虐待やヤングケアラー等の問題防止のみならず、家族QOL向上を視野に入れた新しいきょうだい支援のあり方を示した。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to investigate family quality of life (QOL) from the perspective of the challenges faced by parents in raising siblings of children with disabilities and develop a support program for improving family QOL. Based on 659 valid responses to the Questionnaire for Parents Raising Siblings conducted in the Hokkaido, Hokuriku, Kanto, Kinki, and Chugoku regions of Japan, 88.5% of the respondents were concerned about raising siblings. Furthermore, the family QOL of the parents who were worried about raising siblings was significantly lower than that of the parents who were not necessarily worried. Subsequently, we developed a discussion-based sibling child-raising support program consisting of six sessions held once a month for 2 hours and implemented it for 16 mothers who applied for participation after seeing the information leaflet. We found that the program significantly improved the participants' sense of competence in raising siblings of children with disabilities.

研究分野：障害のある子ども及びその家族支援

キーワード：障害のある子どものきょうだい きょうだい支援 家族支援 家族QOL 親支援

1. 研究開始当初の背景

●**障害児(以下、同胞)とともに暮らす兄弟姉妹(以下、きょうだい)の問題は、親の課題、さらには家族機能の課題でもあり、きょうだいへの支援アプローチだけでは不十分。**

きょうだいの適応上の問題は、これまで主としてきょうだい自身の視点から検討されてきた(McHale 他 1989, et al.)。しかし、きょうだいの問題は親の抱える課題の頭れ(阿部他 2011)であり、親自身がきょうだい児育ての悩みを抱え、きょうだいとの意識の齟齬に苦しんでいる状態である(阿部他 2012)。一方、きょうだいの抱える問題が家族の機能不全から生じているとの指摘(遠矢, 2009)、親自身が身に付けた「自助」主義的家族観が、過大な家族役割をきょうだいに求めているとの指摘(戸田, 2012)、さらには、今や日本における喫緊の課題となっている子どもの虐待事例の中に、障害児本人のみならずそれに近い件数のきょうだいが含まれていたという報告(藤原, 2013)やきょうだいが同胞の世話のため学業に支障をきたしている事例報告(戸田, 2015)などから、もはやきょうだいの問題は、本人へのアプローチのみでは解決し得ず、家族 QOL の問題としてとらえる必要がある。

●**従来のきょうだい支援プログラムは、きょうだいのみを親から切り離して支援するものが中心であり、家族機能の中心的駆動者である親のきょうだい児育て支援、さらに家族 QOL 向上の視点から検討されてきていない。**

実地調査(阿部・小林, 2012; 阿部, 2013)から、きょうだい支援先進国である米英国においてさえも、きょうだいのみを対象とする支援が中心で、親はきょうだい支援に関する理解啓発の対象ではあっても、直接の支援対象とは見なされてこなかった現状が示された。そこで、Abe & Annen (2013)、阿部・神名(2015)は、きょうだいと家族の関係を直接支援する必要性を鑑み、きょうだいと家族と一緒に活動する支援プログラムを開発・実践し、きょうだいの同胞に関する否定的感情や親子関係が改善するかを検証した。きょうだい 16 名とその母親に対する実践の結果、きょうだいの同胞に関する「余計な負担の感情」が有意に減少し、FDT 親子関係診断検査において親子関係が安定化する傾向が確認された。このように、家族参加型支援プログラムが親ときょうだい児の関係を改善するために有効であることが明らかとなった。しかしながら、親自身がきょうだい児育てを変革する力をつけるための支援方法は、いまだ不明確なままであり、きょうだい児育てに悩む親を地域でエンパワメントする方法を創出する必要がある。これは、上記で報告されているような、きょうだいの虐待やヤングケアラー等の家族問題につながる家族機能不全を改善し、家族 QOL の向上をもたらすものであると考える。

2. 研究の目的

●**きょうだい児を育てる親の課題を明らかにし、その解決に向けた支援プログラムを開発し、その効果を検証する。**

以下の 2 点から取り組んだ。

【研究①】きょうだい児育てに取り組む親の支援課題を家族 QOL の視点から調査し、明らかにする。

【研究②】研究①に基づく親支援プログラムを開発し、地域における実践を通して、プログラムが親のきょうだいに関する子育て実践力に及ぼす効果を検討する。

以上により、きょうだい児育てに悩む親をエンパワメントする方法を具体的に発信し、家族 QOL 支援の充実に資するものとする。

3. 研究の方法

【研究①】アンケート調査

(1) 対象: 北海道・北陸・関東・近畿・中国に所在する特別支援学校、発達支援センター、障害児(者)親の会、その他計 30 か所に所属する障害のある子どもとそのきょうだい児を育てている親とした。

(2) 質問紙: 「きょうだい児の子育てアンケート」

・Face 項目: 回答者の立場(父・母・その他)、きょうだい児全員の年齢・同胞(複数の場合は最年長者)から見た出生順、同胞全員の性別・年齢・障害種・所属の記入を求めた。

・きょうだい児育てについて: 悩みの有無(現在、過去)、悩みの内容(予備調査を基に作成した 22 項目から複数選択、希望者のみ自由記述追加)、きょうだい児育てに関する学び機会への参加意思と、学びたい・知りたい内容(上記 22 項目から複数選択)の記入を求めた。

・家族 QOL について: 「日本版 FQOL Scale」(小林・阿部・藤井, 2016: The Beach Center FQOL Scale (2012) の邦訳版 5 件法 25 項目)の記入を求めた。

(3) 実施方法

各機関を通じてアンケート用紙を配布し、匿名回答・厳封の上、個人による直接郵送、あるいは各機関において個別回収後に郵送する方法で回収した。調査期間は、2017 年 9 月～2018 年 4 月であった。

(4) 分析方法

・きょうだい児育てについて:

量的分析: 最年長同胞の障害種により、単一身体障害のみ(以下、PD 群)、重度・重複障害(SMID 群)、知的障害(他障害併有を含む、ID 群)、知的障害を併有しない発達障害(DD 群)の 4 群に分けるとともに、各家族の最年長きょうだい児の年齢に基づき、幼(0～6 歳)群・小(7～12 歳)群・中高(13～18 歳)群・成人(19 歳以上)群に分け、項目ごとに度数を単純比較し、統計的分析を実施した。

質的分析: 悩みに関する自由記述を意味内容ごとに抽出してデータ化した後、カテゴリー分類した。

・家族 QOL について: きょうだい児育ての悩み有、悩み無の 2 群間で家族 QOL 平均得点を比較し

た。引き続き、因子構造を明らかにし、上記と同様に「障害種」「年齢」、及び「出生順」の属性をそれぞれペアにして独立変数とし、下位尺度得点を従属変数として、3種類の2要因分散分析(混合計画)を行い、家族QOLにおける各要因と下位尺度得点との関係について検討した。

・統計的分析には、エクセル統計2016を使用した。

【研究②】実践による支援プログラム開発

(1) 対象: 研究協力機関に所属する、プログラムへの参加を希望した0~13歳のきょうだい児20名(兄7名、姉4名、弟5名、妹4名)を育てる母親17名(うち、3名が複数きょうだい児有)。同胞の年齢は3~8歳、障害種別は、ASD、知的障害、脳性まひ、SMID、ADHD(重複有り)。

(2) 支援プログラム「きょうだい児育ての勉強会」

概要を【Table 1】に示す。約1時間半のセッションを月1回の頻度で計6回実施した。

(3) 効果測定

・参加者評価: 最後まで参加した16名について、参加前後に、「きょうだい児の子育てがうまくいっているかについての自己評価」(10点満点評価)、「プログラムの有用性評価」(5件法)を実施した。

・成果物評価: 参加者同士の話し合いを中心に展開した第1~3回の3セッション分において、各参加者が記入した付箋やワークシートの記述を意味内容に応じてカテゴリ分類した。

【倫理的配慮】

本研究の実施にあたっては、大学の研究倫理審査委員会の承認を得た(承認番号:北教大研倫2018054001)。なお、利益相反はない。

【Table 1 支援プログラム内容の概要】

テーマ	主な内容	ホームワーク
我が家のメンバー紹介	家族自慢・きょうだい児の子育ての悩みをグループで紹介し合う	きょうだい児の「ほのぼのした」エピソードを集めよう
こんな時どうする?①	きょうだい児がもつ不公平感や不満に関する架空事例について、対応方法をグループで話し合う	きょうだい児に「気にかけているよ」と、注目のプレゼントをしよう
こんな時どうする?②	きょうだい児が、友達に同胞を知られたくないとする架空事例について、対応方法をグループで話し合う	きょうだい児が話してくれた言葉や見せてくれた行動のエピソードを集めよう
先輩お母さんと話そう	成人したきょうだい児の母親と懇談する	家族をいろいろな場面でほめて、「ほめほめ名人」になろう
大人のきょうだいと話そう	成人したきょうだい児と懇談する	きょうだい児と3分間の「ラブラブふれあいタイム」をしよう
これからの話をしよう	5年、10年、20年後にきょうだい児にかけてやりたい言葉を考える	無

4. 研究成果

【研究①-1】きょうだい児育てアンケートの量的検討

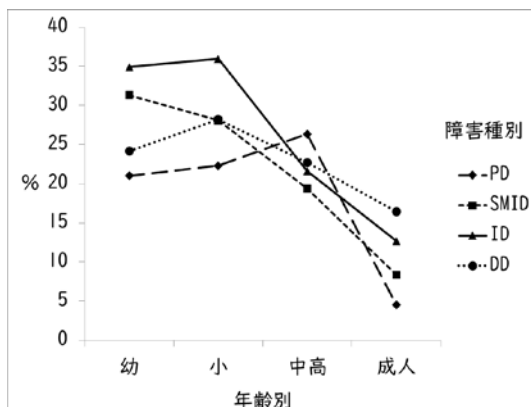
アンケート配布数1981中、回収数751(回収率37.9%)、データの不備及び障害種の無記入を除いた有効回答数は659(回収率87.7%)で、そのうち、きょうだい児の年齢が無記入であったものを除いた回答数は654(同87.1%)であった。得られたデータを分析した結果、以下のことが示された。

① 有効回答659の内、88.5%の親が、過去及び現在において、きょうだい児育てに悩んでいた。

② 同胞の障害種4群、及び、きょうだい児の年齢別4群を独立変数として、悩みの有無を比較したところ、年齢別比較では、悩み有群は、幼群・小群で期待値より有意に多く、成人群で少ない状況となり、年齢が低いほど悩む親が多数であった($p < .01$)。障害種別群内で年齢別比較をしたところ、SMID群内では幼群で悩み有群が期待値より有意に多く、ID群内では幼群、小群で、悩み有群が期待値より有意に多かった($p < .01$)。また、年齢群内で、障害種別に比較したところ、幼群でのみ障害種別による差が見られ、悩み有群がSMID群で有意に多かった($p < .05$)。このことから特にきょうだい児が低年齢期にある場合に、悩みを抱える親が多数であり、その傾向は、知的障害のある子ども、及び障害の重い子どものきょうだい児を育てている場合に、より顕著となることが示された。

③ 悩み内容の選択率には、障害種別、年齢別による有意差が見られ、2要因分散分析では、各要因の交互作用が有意となった($p < .01$)【Fig. 1】。年齢別における、障害種別の単純主効果、及び、障害種別における年齢別の単純主効果がいずれも有意であり、若い親は子育て経験が浅い状況で、同胞ときょうだい児の子育ての両立という難しい局面で苦慮しており、特に意思疎通や理解が難しいSMIDやIDのある子どもと、きょうだい児の子育ての両立は、より多くの悩みを引き起こすこととなると推測された。

④ 障害種別に選択された悩みを見ると、「同胞のことで、きょうだい児が周りからいじめられたり、いやな思いをしたりしたときにどうするか」とする、



【Fig. 1 悩み項目選択率平均における年齢別、及び障害種別の交互作用】

きょうだい児と周囲との関係性が、全群で上位を占めた。さらに PD 群、SMID 群、ID 群では、「きょうだい児がいつも同胞より後まわしになって、我慢させてしまうのをどうしたらよいか」「きょうだい児が訴える不満や不公平感にどう対処するか」とする、親子関係の悩みが共通して上位であった。一方、DD 群では、「親自身の感情や気持ちのコントロールをどうしたらよいか」「きょうだい児と同胞との間でトラブルが起きたとき、どう対処するか」が上位を占め、外見からわかりにくい障害特性により、同胞ときょうだい児のトラブルが起こりがちであること、さらにそのような状況に置かれている親の心理的負担感が示唆された。

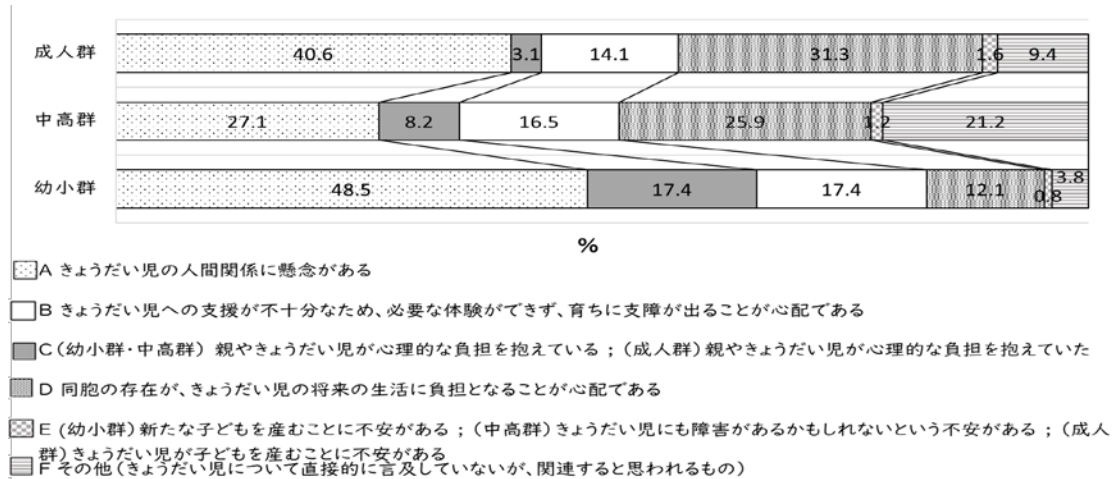
⑤ きょうだいの年齢別群で上位に選択された悩みを見ると、幼群では「同胞のことで、きょうだい児が周りからいじめられたり、いやな思いをしたりしたときにどうするか」「きょうだい児が訴える不満や不公平感にどう対処するか」、小群では「きょうだい児が訴える不満や不公平感にどう対処するか」、「親なき後のことをきょうだい児とどのように話すか」、中高群では「親なき後のことをきょうだい児とどのように話すか」「思春期を迎えたきょうだい児への接し方をどうしたらよいか」、そして、成人群では「親なき後のことをきょうだい児とどのように話すか」「きょうだい児の交際相手や、結婚相手に同胞のことをどう話すか」となり、各年齢期における親子関係、及び周囲との人間関係への懸念と、徐々に現実味を帯びてくる親なき後への懸念が中心であった。

⑥ 一方、親が学びたいと願う内容は、各年齢群とも親なき後に関するきょうだい児との協議方法であり、きょうだい児の現状よりも将来の安心に関心がある親の思いが明らかとなった。

【研究①-2】きょうだい児育てアンケートの質的検討

自由記述から得られた 281 項目をカテゴリー分類したところ、以下の結果が得られた。

- ① 各年齢群共通の 6 カテゴリー (A~F) が見出された【Fig.2】。「きょうだい児の人間関係への懸念」には最多数の項目が含まれ、さらに、一定数の「きょうだい児と親の心理的負担感」が見出された。
- ② 各カテゴリーに含まれる意味内容項目数の割合には、ライフステージに応じた差異が確認された。



【Fig.2 きょうだい児育ての悩み自由記述のカテゴリー分類とその意味内容項目の割合】

【研究①-3】家族 QOL アンケートの検討

有効回答数は 606 (回収中 80.7%) で、分析結果は以下のとおりである。

① きょうだい児育ての悩み有群の家族 QOL の平均値が悩み無群より有意に低くなった ($p < .001$)。同胞の障害種別、きょうだい児の出生順・年齢にかかわらず、同様の結果であった。

② 因子分析 (主因子法、プロマックス回転) により、小林・阿部・藤井 (2016) と同じ 2 因子構造となり、さらなる分析の結果、各因子に 2 層構造が得られた【Table 2】。原版の「子育て」因子が明確化されず、障害のある子どもの育成を最優先関心事としがちな日本の家族の日常において、「子育て」は、「家族内環境要因」全体に関与する前提要因であり、個別に抽出されるものとはならないと考えられた。

③ 家族 QOL に関連する要因について：2 要因分散分析の結果、因子構造要因と障害種要因の主効果のみが確認された【Table 3】。下位尺度間比較では、「障害種」「年齢」「出生順」にかかわらず、「家族内環境要因」得点が「家族外環境要因」得点より有意に低く ($p < .001$)、きょうだい児家族において、「家族相互関係」「精神的健康」が十分充実していない可能性が示唆された。一方、障害種別では、多

【Table 2 きょうだい家族 QOL の因子構造】

要因	項目	α
家族内環境要因	家族相互関係 (7項目)	0.92
	精神的健康 (8項目)	0.88
家族外環境要因	身体的・物的健康 (6項目)	0.82
	障害関連サポート (4項目)	0.84
因子間相関	上2尺度相関 0.69, 下2尺度相関 0.63	

【Table 3 分散分析の結果】(有意差有のみ)

障害種	n	家族内環境要因		家族外環境要因		ANOVA
		平均	SD	平均	SD	
PD	61	3.45	0.80	3.51	0.66	F(3,592)
ID	268	3.50	0.69	3.65	0.60	=2.66,
SMID	189	3.37	0.67	3.46	0.68	p<.05,
DD	78	3.46	0.73	3.59	0.65	ID>SMID
*検定 家族内環境要因<家族外環境要因, t(605)=4.75, p<.001						

重比較の結果、SMID 群の尺度得点が ID 群を下回り ($p<.05$)、日常的な介護を要する SMID 群の特性が関係していると推測された。

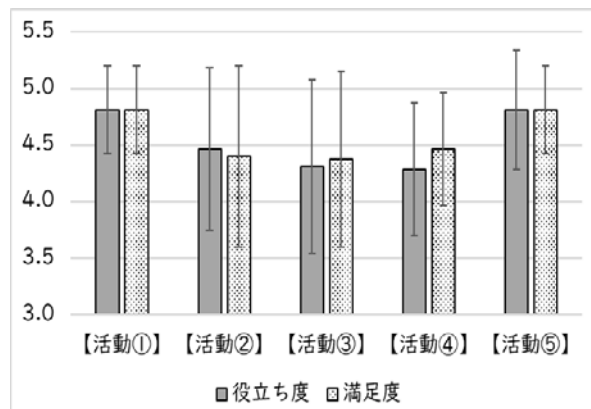
【研究①の成果から得られた、支援プログラム開発への示唆】

- ① 低年齢のきょうだい児を育てる場合に、より支援プログラムの実施ニーズが高い。
- ② 同胞の障害種ときょうだい児のライフステージに応じた、現実的な子育て支援の内容を含める。
- ③ 親自身のメンタルヘルスや家族観のパラダイムシフトを促す内容を含める。
- ④ きょうだい児の主体的選択と決定力を育て、そのより充実した生き方を支える視点から子育てに取り組む土台作りを目指す。
- ⑤ きょうだい児の年齢に応じた親への支援内容として、「幼少期の子育て実質的支援」「幼児期からのきょうだい児理解支援」「中高生期における精神的支援」「成人期の情動的支援」が必要である。
- ⑥ きょうだい児の全ライフステージにおける支援内容として、「親子のコミュニケーション促進支援」「きょうだい児と周囲との関係性、及び理解者(仲間)づくりにつながる支援」が必要である。

【研究②-1】支援プログラム参加者評価による検討

実践により、開発したプログラムについて、以下の効果が確認された。

- ① きょうだい児育ての状況に関する主観的評価では、Post 時点で有意な差をもって、「うまくいっている」とする点数が増加したことが確認された ($p<.05$)。
- ② 支援プログラムに関する有用性評価では、各選択肢に 1~5 点をあてはめ、平均値 (SD) を算出したところ、【Fig.3】のとおり、どの項目も 4 点以上の高評価を得た。
- ③ プログラム実施後アンケートの自由記述では、「これまで一人で悩んでいたが、協議でいろいろな考えがあるとわかり、楽になった」「『宿題』に取り組むことで、きょうだい児との関係を見直すことができた」などが挙げられた。



【Fig.3 参加者の支援プログラムの有用性評価】

【研究②-2】支援プログラム参加者の成果物による検討

開発したプログラムの実践場面で参加者が記入したワークシート等の内容を分析した結果、参加者における以下の変容が確認された。

- ① 最初のきょうだい児育ての悩みに関する話し合い活動では、悩みの自己開示と共感体験により、参加者の解放感と同じ問題に立ち向かう仲間意識が生み出された。
- ② 第 2 回のきょうだい児の不満感情への対応に関する話し合い活動では、親の価値観に基づくきょうだい児対応から、きょうだい児自身の心情と視点に基づくきょうだい児対応へと、きょうだい児育てのパラダイムシフトが生じた。
- ③ 第 3 回のきょうだい児と周囲との関係懸念に関する話し合い活動では、親の理想とするきょうだい児像に向かう子育てから解放され、日々子どもなりに葛藤しながら「きょうだい児」を育てている、現実的なきょうだい児の育ちの過程に伴走する子育てへの意志が見い出された。

【研究②の成果から得られた、開発した支援プログラムに関する知見】

- 以上のことから、開発した「きょうだい児育て支援プログラム」について、以下が明らかとなった。
- ① 参加者のきょうだい児育て効力感の向上をもたらす、有用性を感じられる活動内容を含んでいる。
 - ② 親同士の意見交換ができる、「同じ立場の仲間との出会い」が重要である。
 - ③ 日々の生活できょうだい児とのかかわりを促進する具体的な手立てを提供するのが効果的である。
 - ④ ファシリテーターのサポートのもとで、自ら選んだテーマに基づいて親同士が忌憚なくきょうだい児育てについて話し合う活動により、セルフヘルプ・グループ効果を引き出すことができる。
 - ⑤ プログラムにおける話し合い活動の効果には、参加者の共通性と異質性のバランスが影響する。

5. 研究のまとめと今後の課題

本研究の成果として、

- ① きょうだい児を育てる親の約 9 割がきょうだい児育てに関連した悩みを持っていることと、その悩みの内容が明らかになった。
- ② きょうだい児育ての悩みと家族 QOL には関連があり、きょうだい児育ての悩みを解決するための支援方法を開発することは、家族 QOL 向上につながる事が明らかになった。
- ③ アンケート調査とそれをもとにしたプログラム開発実践研究を通して、親のきょうだい児育て支援に含めるべき内容が明らかとなった。

今後の課題として、さらなる実践研究を通して、プログラムコンテンツを充実させる必要がある。

※ 本研究に多大なご協力くださった、本当に多くの関係各位に深くお礼申し上げます。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 阿部美穂子・岡島紗也奈・勝俣有菜・清水来夢	4. 巻 8
2. 論文標題 障害のある子どものきょうだい児を育てる親の悩みに関する質的検討 - アンケートの自由記述分析 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 山梨県立大学看護学部・看護学研究科研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 11 - 23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 阿部美穂子	4. 巻 7
2. 論文標題 障害のある子どものきょうだい児を育てる親の悩みに関する調査研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山梨県立大学看護学部・看護学研究科研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 阿部美穂子・小林保子	4. 巻 98
2. 論文標題 障害のある子どものきょうだい児を育成する親の支援ニーズに関する研究 - 同胞の障害タイプに着目して -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 児童研究	6. 最初と最後の頁 43-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿部美穂子・二宮信一・西田めぐみ・小林麻如	4. 巻 50
2. 論文標題 インクルーシブ教育体制における特別な支援ニーズのある子どもの家族支援 - アイスランドにおけるインタビュー調査から見えてきたもの	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北海道教育大学釧路校研究紀要「釧路論集」	6. 最初と最後の頁 61-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 阿部美穂子・佐々木由奈	4. 巻 69(1)
2. 論文標題 小学校特別支援学級で使用する連絡帳における子育て支援機能の事例的検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北海道教育大学紀要・教育科学編	6. 最初と最後の頁 93-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 阿部美穂子	4. 巻 68(1)
2. 論文標題 きょうだいの育成に関する親の支援ニーズ：障害のある子どもの親へのインタビュー調査による	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 北海道教育大学紀要・人文科学・社会科学編	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 阿部美穂子・小淵隆司・木戸口正宏・戸田竜也・小林麻如・安澤恵美	4. 巻 49
2. 論文標題 発達障害のある子どもとその家族への支援に関する学生の意識変容 - 大学における地域貢献プロジェクト「おひさまクラブ」での実践を通して -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 釧路論集	6. 最初と最後の頁 93-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 安藤正紀・阿部美穂子・松川節理子・飯村敦子・上原淑枝・小林保子・是枝喜代治	4. 巻 96
2. 論文標題 オーストラリア(ニューサウスウェールズ州)における乳幼児の支援と特別支援教育の現状	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 児童研究	6. 最初と最後の頁 33-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林保子	4. 巻 25
2. 論文標題 療育期から学齢期にある障害がある子どもの家族QOLに関する研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 鎌倉女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 27-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿部美穂子・神名昌子	4. 巻 54(3)
2. 論文標題 きょうだいの障害のある同胞に関する否定的感情と親からのサポート期待感との関係に関する調査研究	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 特殊教育学研究	6. 最初と最後の頁 157 - 167
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 阿部美穂子	4. 巻 48
2. 論文標題 ニュージーランドにおける成人期きょうだい支援プログラム - Second Generation Workshopについて -	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 北海道教育大学釧路校研究紀要「釧路論集」	6. 最初と最後の頁 69-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 阿部美穂子	4. 巻 9
2. 論文標題 話し合い参加型活動が障害のある子どものきょうだい児を育てる母親にもたらす意識変容 : ワークシートの記述分析に基づいて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 山梨県立大学看護学部・看護学研究科研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計28件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 阿部美穂子・小林保子
2. 発表標題 きょうだいが育つ家族のQOLに関する研究 - 「日本版 FQOL Scale」による家族QOL得点の分析 -
3. 学会等名 日本特殊教育学会第59回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 阿部美穂子
2. 発表標題 自閉症スペクトラム障害のある子どもとそのきょうだい児を育てる家族のQOLに関する検討
3. 学会等名 日本LD学会第30回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 阿部美穂子
2. 発表標題 自閉症スペクトラム障害並びに知的障害のある子どものきょうだい児を育てる親の悩みに関する検討
3. 学会等名 日本LD学会第29回大会（兵庫）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 阿部美穂子
2. 発表標題 障害のある子どものきょうだい児を育てる親の悩み
3. 学会等名 日本特殊教育学会第58回大会（福岡）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Mihoko Abe & Yasuko Kobayashi
2. 発表標題 Research on parents' needs when raising siblings of children with Autism Spectrum Disorder and on their family quality of life
3. 学会等名 The World Congress of the International Association for the Scientific Study of Intellectual and Developmental Disabilities (IASSIDD) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 阿部美穂子
2. 発表標題 自閉症スペクトラム障害のある子どものきょうだい児を育てる親の子育ての悩み
3. 学会等名 日本LD学会第28回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 阿部美穂子
2. 発表標題 きょうだい児育成支援プログラム開発に関する実践的研究
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 阿部美穂子, 下川和洋, 小林保子, 菊池紀彦, 川住隆一
2. 発表標題 重い障害のある子どもの家族QOLを支援するには
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 阿部美穂子, 小林麻如
2. 発表標題 小グループによる関係づくりを重視した短期ペアレント・トレーニングの実践(1)
3. 学会等名 日本保育学会第72回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yasuko Kobayashi & Mihoko Abe
2. 発表標題 Study of Japanese Family Quality of Life Assessment (J-FQOL) scores and their changing factors in families with children with special needs
3. 学会等名 The World Congress of the International Association for the Scientific Study of Intellectual and Developmental Disabilities (IASSIDD) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 阿部美穂子
2. 発表標題 重症心身障害児(者)のきょうだい児育成にかかる親の悩みと家族QOLの分析
3. 学会等名 第44回日本重症心身 障害学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Mihoko ABE
2. 発表標題 Practical Study on Relationship Support for Parents and Siblings of Children with Disabilities
3. 学会等名 5th IASSIDD Europe Congress (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小林保子
2. 発表標題 障害がある子の家族支援とアセスメントの活用 - 家族QOLアセスメントを用いた事例研究
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小林保子
2. 発表標題 特別なニーズのある子の家族支援その3 医療的ケア児の保育保障とインクルーシブ保育
3. 学会等名 日本保育学会第71回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 阿部美穂子
2. 発表標題 自分らしく豊かに生きる力を育てるために
3. 学会等名 第39回 北海道特別支援教育研究協議会 道東地区研究大会（ひまわり大会）（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 阿部美穂子
2. 発表標題 障害のある子どものきょうだいをそだてる親のニーズ - 親へのインタビュー調査から -
3. 学会等名 日本特殊教育学会第55回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 阿部美穂子・川住隆一・小林保子・江利川ちひろ・野口和人
2. 発表標題 障害のある子どもとともに生きる家族のQOL - 支援ニーズについて考える -
3. 学会等名 日本特殊教育学会第55回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 阿部美穂子・小林麻如
2. 発表標題 発達障害がある子どもの支援実践に取り組む学生の意識変容
3. 学会等名 日本LD学会第26回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 諏方智広
2. 発表標題 発達障害児のきょうだい支援
3. 学会等名 小児神経学会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 諏訪智広
2. 発表標題 きょうだい会の役割
3. 学会等名 発達心理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小林保子
2. 発表標題 障害がある子の家族支援とアセスメントの活用 家族QOLアセスメントを用いた事例研究より
3. 学会等名 日本特殊教育学会第55回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小林保子
2. 発表標題 特別なニーズのある子の家族支援 その2 - 居宅訪問型保育の動向 -
3. 学会等名 日本保育学会第70回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 阿部美穂子
2. 発表標題 成人期きょうだい支援プログラムに関する調査研究 - Second Generation Workshop in New Zealandについて -
3. 学会等名 日本特殊教育学会第54回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 小林保子・阿部美穂子
2. 発表標題 家族QOLアセスメントに関する研究報告5 アセスメントによる家族QOLの障害特性の検証
3. 学会等名 日本特殊教育学会第54回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 阿部美穂子・志賀文哉・諏方智広・松本理沙・吉川かおり
2. 発表標題 家族支援の視点から障害のある子どものきょうだい支援を考える(5) ライフステージに応じた支援：児童期から青年期まで
3. 学会等名 日本特殊教育学会第54回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Mihoko Abe
2. 発表標題 Practical study concerning the development of a support program for siblings and families of children with profound intellectual and multiple disabilities (PIMD)
3. 学会等名 International Association for the Scientific Study of Intellectual and Developmental Disabilities 15th World Congress (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 小林保子・阿部美穂子・石上志保
2. 発表標題 障がいのある子どものきょうだい支援
3. 学会等名 第5回日本小児診療多職種研究会(招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 阿部美穂子
2. 発表標題 重症児者の兄弟姉妹の思い
3. 学会等名 全国重症心身障害児(者)を守る会 第28回東海・北陸ブロック大会(招待講演)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 尾崎康子・阿部美穂子・水内豊和	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 194
3. 書名 よくわかるインクルーシブ保育	

1. 著者名 阿部美穂子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 多賀出版	5. 総ページ数 444
3. 書名 障害のある子どものきょうだい支援プログラム開発に関する実践的研究	

1. 著者名 尾崎 康子・小林 真・水内 豊和・阿部 美穂子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 252
3. 書名 よくわかる障害児保育 [第2版]	

1. 著者名 小林芳文（監）・是枝喜代治・飯村敦子・阿部美穂子・安藤正紀	4. 発行年 2017年
2. 出版社 日本文化科学社	5. 総ページ数 253
3. 書名 保育・療育・特別支援教育に生かすムーブメント教育・療法「MEPA - R活用事例集」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	諏方 智広 (SUWA Tomohiro)		
研究協力者	清田 悠代 (KIYOTA Hisayo)		
研究協力者	松本 理沙 (MASTUMOTO Risa)		
研究協力者	服部 隆則 (HATTORI Takanori)		
研究協力者	藤澤 喜一 (FUJISAWA Kiichi)		
研究協力者	神名 昌子 (KANNA Masako)		
研究協力者	安念 千明 (ANNEN Chiaki)		
研究協力者	谷津 尚美 (YASTU Maomi)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	藤原 敬旦 (FUJIWARA Keitan)		
研究協力者	海老 京子 (EBI Kyoko)		
連携研究者	小林 保子 (KOBAYASHI Yasuko) (30435234)	鎌倉女子大学・児童学部・教授 (32705)	
連携研究者	大江 啓賢 (OOE Hirotaka) (40415584)	東邦大学・文学部・准教授 (32663)	
連携研究者	戸田 竜也 (TODA Tastuya) (60352639)	北海道教育大学・教育学部・准教授 (10102)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関